

梶並吉光「司法試験に合格するために必要なこと」

1、自己紹介

法科大学院修了年度：令和5年 既修

受験回数：1回

選択科目：倒産法

私は、大学の経営学部を卒業後、公立中学校の教師として7年勤務した後、阪大の法科大学院（既修）に進学しました。2年後に卒業し、令和5年4月から同年7月の司法試験までフルタイムで働きつつ（司法試験1ヶ月前に休職）、司法試験に臨み、1回目の受験で合格しました。

2、司法試験に合格するために必要なこと

（1） 司法試験に合格するために必要なことは、①自分の学力と司法試験を良く知り、②ゴールから逆算して計画を立てて、③正しい学び方で、④メンタルや経済面に配慮しつつ勉強を継続することだと思います。

（2） 司法試験に挑戦することは登山に似ている

司法試験への挑戦は登山に似ていると思います。どういうことかということ、登山はやみくもに時間をかけたからといって頂上に辿りつけるわけではありません。無計画に登山に臨めば頂上にたどり着くどころか、遭難するおそれさえあります。そのため、しっかりその山の特徴を調査して、自分の登山の力量と照らし合わせながら、どのルートを進むか、どのような道具を用意するか、アクシデントが起きたらどう対処するか、事前にどんな訓練をしておく必要があるか等、しっかり計画をたてて登山に臨む必要があります。

司法試験が論述形式の試験で、日本で最難関の試験である以上、それに挑戦するということになれば、高い確率で合格できるという採算がなければなりません。長年司法試験に挑戦して最終的に合格できないことは経済的にも、精神的にもリスクが大きいからです。そのため、司法試験という険しい山に挑戦して頂上にたどりつくためには、登山をするときにはなって上述の（1）の点に配慮して勉強をしていく必要があると思います。

3、法科大学院に入学するまで

私は、法科大学院に入学するまでは公立中学校の教師として働いていました。司法試験をいきなり目指すのはリスクがあると思い、お金を貯めつつ、まずは下位資格からはじめて自分の力量をはかり、徐々にステップアップするという計画をたてました。そこで、行政書士試験の勉強から始めました。その際、某予備校の行政書士講座を利用しました。また並行して某通信制の法学部にも通い、日々のレポート添削授業、スクーリングなどを利用して法律の論文の書き方を学びました。通学制の法学部で学んだことがなかったため、ある科目についていきなりレポートを書くことはせず、定評のある基本書を1冊一通り読んでからレポートに臨んでいました。こうした学習を経て、3回目の行政書士試験に合格する頃には一定

の法的文章が書けるようになっていました。

行政書士試験合格後は、次のステップとして司法書士試験に着手しました。しかし、仕事が忙しくなったため、1～2年ほどは1日2時間ほどの勉強がやっとで身が入りませんでした。そうした頃、地元の岡山大学法科大学院でロースクールについての説明会があり、そこでの助言により、司法書士試験の挑戦をやめ、ストレートに法科大学院（既修）の入試の勉強を始めました。その手始めとして、まず司法試験の過去問の直近1年分の問題と模範解答をざっと読んでこれから最終的に目指す試験がどういうものかを確認してイメージをおぼろげながら掴んでおくということをしていました。

法科大学院入試の準備期間としては8ヶ月ほどで、その間に司法試験に通ずる法律論文の書き方を市販の書籍や過去問を通じて学びました。

法科大学院入試の際は、ほぼ独学であったため、網羅性のある知識はもっておりませんでした。しかし、過去問で出た問題について、自ら基本書や判例を調べて自分なりに考えてしっかりと論理を組んで答案をつくるということにはかなり時間をかけていました。このような勉強の仕方であったため、一つ一つに時間がかかり、知っている知識や論点は一般的な受験生に比べて少なかったものの、法的な見方考え方、論理的な文章を書く力は一般的な受験生の平均以上には身についており、その点が入試においては評価されたのではないかと思います。

4、法科大学院時代について

法科大学院在学中に一番意識していたことは、予習をしっかりと日々の授業を大切にすることです。法科大学院が開講している期間は、司法試験対策はほぼ行わず、長期休みや卒業後にすれば良いと考えていました。その理由は次の通りです。すなわち、司法試験は法律家として必要な素養があるかどうかをはかる試験です。その司法試験に合格するために、本当に必要な力は、知識や論証パターンをやみくもに増やすことではなく、法的な見方考え方、その道筋を他者にわかるように説明する力だと思っていたからです。本学の先生方はその分野に精通する一流の学者であり、その先生方がなされる授業を大切に受講することは、上述の本質的な能力を身につけることにつながると考えていたからです。

知識や論証パターンは独学でも時間をかければ自然と身につくものですが、法的な見方考え方や、その道筋を他者に説明する力は、そう簡単に身につくものではありません。これらの力が十分に身についていないのに、やみくもに知識や論証パターンを増やし続ける勉強をしてしまうと、合格までにとてつもない時間、ハードな勉強を要したり、合格が運に左右されてしまうおそれがあると常々考えていました。法科大学院でこれらの力を身につけられるかどうか、司法試験に合格するかどうかの分岐点だと思っていたました。

その次に意識していたことは、司法試験に直接関係のない科目の授業も丁寧に取り組むことです。司法試験合格に必要な力は、上述した本質的な力だと考えていたので、一見すると直接関係のないように思える科目もこれらの力をのばすのに実は重要です。

5、その他 法学教室の活用

学習教材として3年後期から司法試験にかけて、苦手意識があった刑法、民事訴訟法、会社法について法学教室の「連載」を読んで勉強していました。法学教室を使うようになった経緯としては、エクスターン先の弁護士で、わずか平均3枚半の答案枚数で司法試験に合格したという方がいて、驚き、その先生に勉強方法を拝聴したところ法学教室をメイン教材としてすえていたという助言を得たからです。法学教室の具体的な使い方は次の通りです。

まず、法学教室には「連載」というページがあり、これは、有名な法学者が各回ごとのテーマに沿った内容を7ページくらいにまとめたものです。連載は通常数年かけて寄稿されるので回数としては多いもので24回ほどになります。なので一つのまとまった連載を読めばその科目についてある程度網羅的な知識を身につけることができます。それならば基本書を読めばいいのではと思うかもしれませんが、しかし、連載の良さは、なんといっても各回7ページほどの限られた紙はばに内容をまとめなければならない都合上、基礎的かつ重要事項に的がしぼられており、そして学者の深い考察が示されているところです。また、各回が簡潔にまとめられているので細切れ時間に読み物として気軽によめます。実際私は、ご飯を食べているときや電車の移動中に法学教室を読んでいた。

次に無数にある多くの先生の連載から、どの連載を選んで読めば良いかという点について、これは、ロースクールの図書館に行って目次と照らし合わせながら、実際に読んでみてその先生が書く文章と自分の相性を確かめてください。相性があいそうな連載ならどれでも大丈夫です。また、できるだけ連載が完結している過去の連載が良いです。現在進行形の連載は最新の情報をキャッチできるものの、司法試験までに連載が完結しないおそれがあるからです。

6、最後に

ここまで読んでくださりありがとうございます。上記は私が個人的に考えた「司法試験に合格するために必要なこと」です。色々な方法、考え方がありますので、他の方の合格体験記も読んで上で、一つの参考になれば幸いです。

熱心に指導してくださった先生方、様々な事務や相談に丁寧に対応してくださった教務の方々、一緒に切磋琢磨してくれた法科大学院の仲間、色々な面でサポートしてくれた両親、その他の私に関わってくれた全ての方に対して本当に感謝したいです。ありがとうございました。

後輩へ、司法試験は本試験を受けて自分の得点が開示され相場感をつかむまでは、何か得体のしれないとんでもないものに挑んでいるような感覚がありますが、実は合格するのに必要な水準はそこまで高くはないです。知識や論点を網羅しなければならないというようなことはないのです。基礎的なことを正しい学び方で身につけ、法的三段論法を常に意識して答案を書けば十分に合格できます。毎年出題される難しい論点については、その論点についての知識がなくとも、一定の自分なりの法的な見方考え方を示せば、少々筋を外しても点がつきます。なので、今はまず、法科大学院の授業を大切にしてください。それが実は確実にかつ最短で合格する方法だと私は思います。

最後に、法科大学院在学中に特に記憶に残っているエピソードを紹介して筆を置きたいと思います。一つ目は、入学最初の刑法の期末試験の時のことです。当時はズームを用いて試験を受けるというものでした。既修の最初の期末が尋常ではないくらい大変なことはロースクール生なら誰もが知るところだと思いますが、自宅のネット環境が悪かったのか、問題用紙を開くパスワードがうまく受信できなかったことがありました。試験がはじまり、1分1秒を争う中、問題用紙を未だ開けずにおり、「もうだめだ」とパニックになりかけていたときに、同期の仲間が一人「ここをみればパスワードが掲載してあるよ」という趣旨のことをズームの全体の音声機能をつかって教えてくれました。誰もが1分1秒をおしんで試験に臨んでいる最中でのことです。ここに法律家として本当に必要な姿勢をみたような気がしました。

二つ目は、3年生になり、ある程度卒業がみえてきたときに、人と比較して焦りを感じていた時のことです。そのとき仲間から「司法試験は自分との戦い。人は関係ないと思うよ。」という言葉をもらいました。この言葉をもらって救われました。それから、どんなに時間がかかっても、一つの論点に対して、自分の頭で考えて考えて考え抜いたような気がします。

以上